View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyushu University of Health and Welfare Repository

２歳代の語彙発達
―語彙チェックリストを用いた表出語彙の分析―

大森　史隆　　笠井新一郎　　天辰　雅子　　中山　　翼　　飯干紀代子　　山田　弘幸

Vocabulary Development in Children Aged 24 to 35 Months

Fumitaka OOMORI Shinichiro KASAI Masako AMATATSU Tsubasa NAKAYAMA
Kiyoko IIBOSHI Hiroyuki YAMADA

Abstract

This study examined 300 children aged 24-35 months to clarify expressive vocabulary development using the vocabulary checklist questionnaire. Children were classified into 4 periods: first period, 24-26 months; second period, 27-29 months; third period, 30-32 months; and fourth period, 33-35 months. We analyzed median and quartiles of expressive vocabulary and performed one-way analysis of variance to determine which periods differed significantly from other periods. As a result, median total expressive vocabulary was 238.0 in the first period, 423.0 in the second period, 508.0 in the third period, and 661.0 in the fourth period. A clear correlation was seen between total expressive vocabulary, noun vocabulary, verb vocabulary, adjective vocabulary and child age. No significant difference in total expressive vocabulary was evident between second and third periods. These results indicate an incubation period in which the expressive vocabulary is invariable. A significant difference was apparent between the second and third periods in the verb vocabulary, suggesting a qualitative change in the expressive vocabulary. However, the term of increasing verb vocabulary was shorter than that for the noun vocabulary, which previous studies have reported in children aged 18-30 months.

Key words：vocabulary development , children aged 24 - 35 month , vocabulary checklist questionnaire , noun , verb
キーワード：語彙発達，２歳児，語彙チェックリスト，名詞，動詞
2009.11.11受理

Ⅰ．はじめに

日本における語彙発達の研究は，1970年代からなされており，その多くが少数サンプルにより子どもがことばを習得していく一般的法則を明らかにしようとする縦断的研究である[1) 2) 3) 4)]．一方で多数のサンプルにより子どもの語彙発達の輪郭を明らかにしようとする横断的研究は報告が少ない[5) 6)]．

対象児の年齢で区切ってみると，生後６か月から１歳代を中心としたものが多い．これはこの時期が，獲得言語の構造や言語入力との関係を明らかにできる点で興味深いこと[4)]や語彙発達と文法出現との関係を探る上で適していること[7)]が理由として考えられる.この時期の語彙発達は縦断的・横断的研究の双方から２つの段階がある[5) 8)]ことが示されている．第一段階は潜伏期とも呼ばれ，表出語彙数がほとんど増えることのない時期である．第

九州保健福祉大学　保健科学部　言語聴覚療法学科　〒882-8505　宮崎県延岡市吉野町1714番地１号
Department of Speech-Language-Hearing Therapy, School of Health Sciences Kyusyu University of health and welfare
1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-City, Miyazaki Pref., 882-8508 JAPAN

二段階は命名期とも呼ばれ，表出語彙数に爆発的増加がみられる時期である[8]．

一方で２歳以降の語彙発達は縦断的研究により示されるに留まっており１歳代に比較して少ない．これは，表出語彙が膨大になり語彙数を数える方法が限られること，分析に多大な作業量を要することが影響していると考えられる．２歳代は３歳までの１年間で約600語の表出語彙数の増加がみられる時期である．また，多語文や従属文が使われ始める時期であり，発話内容が現前事象から非現前事象へと変化する時期であることを考えると，言語面の変化は著しいものである．よって，この時期の語彙発達について知ることの意義は大きい．加えて，語彙は言語能力を知る１つの手がかりである[9]とされており，子どもの言語能力を評価・支援していく立場にある我々言語聴覚士にとって語彙発達を理解することは意義深い．

そこで，本研究では横断的調査により，２歳代の語彙発達の輪郭を明らかにすることを目的とする．

Ⅱ．方　法

１．調査対象および調査方法（表１）

調査対象は，A県下の保育所に所属する２歳０か月から２歳11か月の子どもである．

調査は，養育者に語彙チェックリストを配布し，記入を依頼した．また，語彙チェックリストの配布と同時に，子どもが正常に発達をしていることを確認するため発達に関するアンケートへの記入も依頼した．発達に関するアンケートの項目は子どもの生年月日，性別や言語発達に関する質問（初語，２語文，３語文の発話時期とその内容）であった．

回収後，保育士が発達上気になる子どもを除外した結果,348名が残った．また，発達に関するアンケートにより初語の時期が２歳以降である場合は明らかに遅れがあるものと考え除外した。さらに，語彙チェックリストへの記入不備により使用できなかった子どもを除外した300名分（男児149名，女児151名）を分析対象とした．

２．語彙チェックリストの内容

語彙チェックリストは，藤原[6]が作成したものを使用し，子どもが表出した語彙にチェックをしてもらった．チェックリストの内訳は名詞736語，動詞304語，形容詞・形容動詞112語，その他（副詞，連体詞，感動詞，あいさつ等）105語を含む，総語彙数1257語であった．また，チェックリストに含まれない語彙を表出していた場合には，自由記述欄に記入してもらった．

３．分析方法

まず，表出語彙数の推移をみるために年齢と語彙数の相関係数を求めた．

次に，語彙獲得は個人差が非常に大きく，代表値としての意味が小さいため，中央値を算出し分析を行った．１歳代を中心とする先行研究においては年齢を１か月ごとに区切り分析を行う場合が多い．しかし，語彙獲得の個人差を考慮すると１か月で区切ることの危険性は大きい．また，２歳代においては１か月間でみられる変化が１歳代に比し少ないこと，本研究は２歳代の語彙発達の輪郭を明らかにすることを目的としたため，１か月ごとの変化を追うのではなく２歳代を４期に分け分析を行うこととした．４期とは，２歳０か月から２歳２か月の第Ⅰ期，２歳３か月から２歳５か月の第Ⅱ期，２歳６か月から２歳８か月の第Ⅲ期，２歳９か月から２歳11か月の第Ⅳ期であった．

期別の表出語彙の推移をみるために，期別語彙数の中央値を算出した．その際，データのバラツキを示すため４分位範囲を併記した．

また，４期の間に有意差があるかどうかを調べるために，Leveneの等分散性の検定を行い，等分散の場合は，１元配置の分散分析を行った後，Bonferroni法による多重比較を行った．等分散でない場合は，Kruskal Wallis検定を行った後，Scheffe法による多重比較を行った．

さらに，名詞，動詞，形容詞・形容動詞での表出語彙数の推移をみるために品詞別語彙数の中央値，品詞別割合を算出した．

なお，本研究における統計処理については，統計ソフトとしてSPSS 14.0J for Windows を用いた．

表１　対象の年齢分布

期	生活年齢	男	女	小計	合計
第Ⅰ期	2:00	14	15	29	83
	2:01	14	15	29	
	2:02	10	15	25	
第Ⅱ期	2:03	13	14	27	83
	2:04	14	12	26	
	2:05	16	14	30	
第Ⅲ期	2:06	17	14	31	72
	2:07	9	9	18	
	2:08	11	12	23	
第Ⅳ期	2:09	8	11	19	62
	2:10	14	11	25	
	2:11	9	9	18	
	合計	149	151	300	300

Ⅲ．結　果

１．語彙と年齢の関係

１）総語彙数の推移（図１）

年齢と総語彙数の相関係数は0.59であり，正の相関を認めた（p<0.05）.

期別語彙数の中央値と４分位範囲は，第Ⅰ期では中央値238.5語（４分位範囲218.0語）（以下，（）内は４分位範囲），第Ⅱ期では中央値423.0語（266.0語），第Ⅲ期では中央値508.0語（246.0語），第Ⅳ期では中央値661.0語（308.75語）であった.

Leveneの等分散性の検定により，等分散を認めたため一元配置分散分析を行った．その結果，第Ⅰ期～第Ⅳ期に差があり（F＝55.0，p<0.05），その後の多重比較（Bonferroni法）では，第Ⅰ期と第Ⅱ期，第Ⅰ期と第Ⅲ期，第Ⅰ期と第Ⅳ期，第Ⅱ期と第Ⅳ期，第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に差を認めた（p<0.05）．第Ⅰ期から第Ⅳ期の変化をみると顕著に増加していくものの，第Ⅱ期と第Ⅲ期の間には語彙数に変化は認められなかった.

２）品詞別語彙数の推移（図２，図３）

（１）名詞語彙数および割合

年齢と語彙数の相関係数は0.59であり，正の相関を認めた（p<0.05）.

期別語彙数の中央値と４分位範囲は，第Ⅰ期では中央値158.5語（123.5語），第Ⅱ期では中央値276.0語（156語），第Ⅲ期では中央値323.0語（108.0語），第Ⅳ期では中央値380.0語（168.0語）であった.

Leveneの等分散性の検定により，等分散を認めたため一元配置分散分析を行った．その結果，第Ⅰ期～第Ⅳ期に差があり（F＝55.9，p<0.05），その後の多重比較（Bonferroni法）では，第Ⅰ期と第Ⅱ期，第Ⅰ期と第Ⅲ期，第Ⅰ期と第Ⅳ期，第Ⅱ期と第Ⅳ期，第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に差を認めた（p<0.05）．第Ⅰ期から第Ⅳ期の変化をみると顕著に増加していくものの，第Ⅱ期と第Ⅲ期の間には語彙数に変化は認められなかった.

名詞の全語彙数に占める割合でみると，第Ⅰ期は69.8%，第Ⅱ期は64.8%，第Ⅲ期は56.1%，第Ⅳ期は60.7%であり，減少傾向にあった．第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての時期は,他の時期より減少傾向が著しかった.

（２）動詞語彙数および割合

年齢と語彙数の相関係数は0.48であり，正の相関を認めた（p<0.05）.

期別語彙数の中央値と４分位範囲は，第Ⅰ期では中央値27.0語（53.75語），第Ⅱ期では中央値79.0語（83.0語），第Ⅲ期では中央値160.0語（213.0語），第Ⅳ期では中央値131.5語（128.5語）であった.

Leveneの等分散性の検定により，等分散を認めなかったためKruskal Wallis 検定を行った．その結果，第Ⅰ期～第Ⅳ期に差があり（ｘ2＝82.6，p<0.05），その後の多重比較（Scheffe法）では，第Ⅰ期と第Ⅱ期，第Ⅰ期と第Ⅲ期，第Ⅰ期と第Ⅳ期，第Ⅱ期と第Ⅲ期，第Ⅱ期と第Ⅳ期，第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に差を認めた（p<0.05）．第Ⅰ期から第Ⅳ期の変化をみると次第に増加していくものの，総語彙数，名詞語彙数に比し増加はやや緩やかであり第Ⅲ期と第Ⅳ期の間には語彙数に変化が認められなかった.

動詞の全語彙数に占める割合でみると，第Ⅰ期は11.9%，第Ⅱ期は18.5%，第Ⅲ期は27.8%，第Ⅳ期は21.0%であり，増加傾向にあった．第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての時期は,他の時期より増加傾向が著しかった.

（３）形容詞・形容動詞語彙数およびその割合

年齢と語彙数の相関係数は0.55であり，正の相関を認めた（p<0.05）.

期別語彙数の中央値と４分位範囲は，第Ⅰ期では中央値18.0語（22.0語），第Ⅱ期では中央値32.0語（28.0語），第Ⅲ期では中央値44.0語（29.0語），第Ⅳ期では中央値

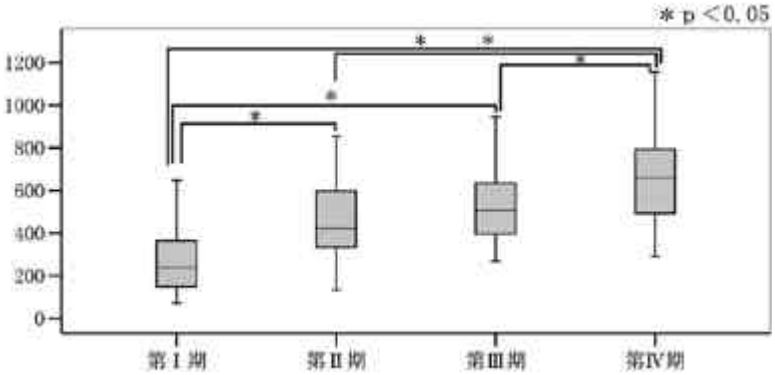

図１　期別総語彙数の推移

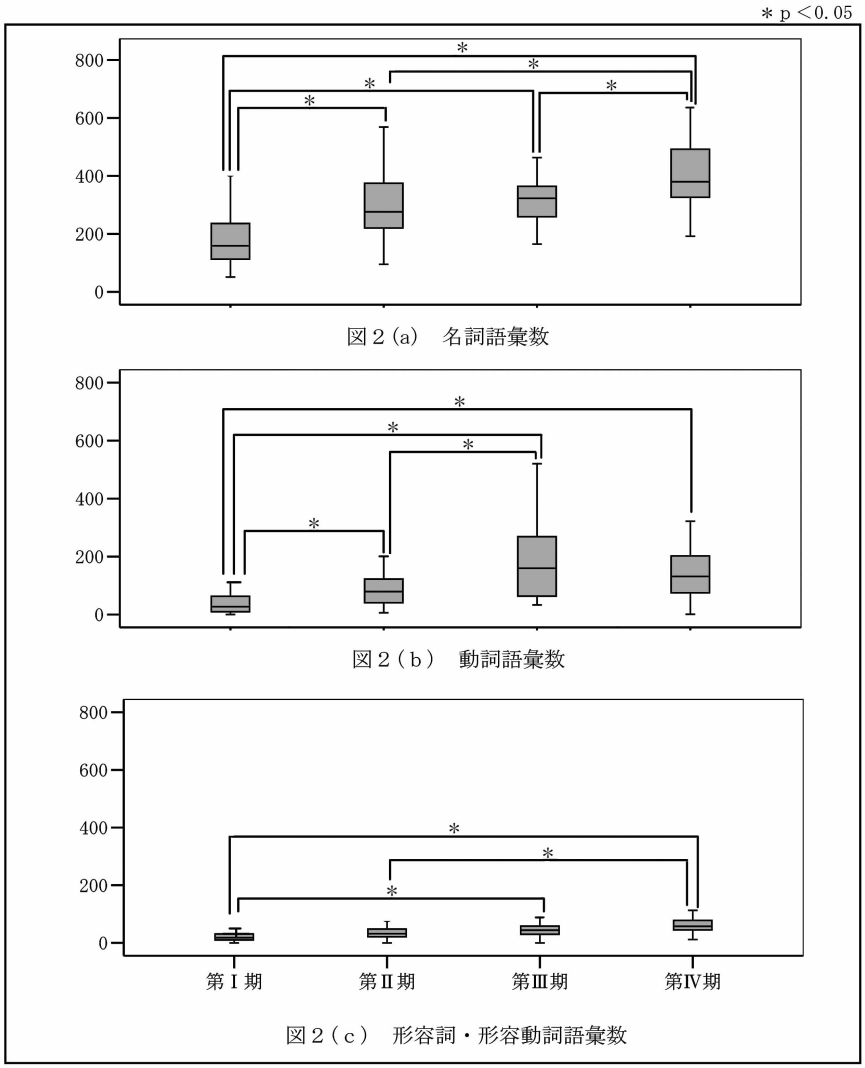

図２(a)　名詞語彙数

図２（b）　動詞語彙数

図２（c）　形容詞・形容動詞語彙数

図２　品詞別語彙数

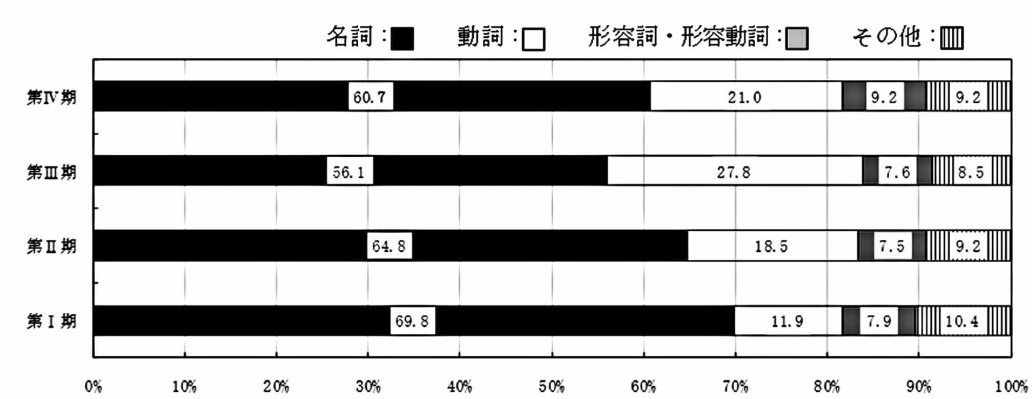

図３　品詞別割合

57.5語（33.75語）であった．

Leveneの等分散性の検定の結果，等分散でなかったためKruskal Wallis 検定を行った．その結果，第Ⅰ期，第Ⅱ期，第Ⅲ期，第Ⅳ期の間に差があることがわかった（$x2=85.4$，$p<0.05$）．さらに，多重比較（Scheffe法）の結果，第Ⅰ期と第Ⅲ期，第Ⅰ期と第Ⅳ期，第Ⅱ期と第Ⅳ期の間に差を認めた（$p<0.05$）．第Ⅰ期から第Ⅳ期の変化をみると次第に増加していくものの，隣接した期には明らかな増加は認められず緩やかな変化であった．

形容詞・形容動詞の全語彙数に占める割合でみると，第Ⅰ期は7.9%，第Ⅱ期は7.5%，第Ⅲ期は7.6%，第Ⅳ期は9.2%であり，ほとんど変化はみられなかった．

（４）結果のまとめ（表２）

第Ⅰ期からの変化をみると，第Ⅰ期と第Ⅱ期の間に有意差が認められたのは，総語彙数，名詞語彙数，動詞語彙数であった．第Ⅰ期と第Ⅲ期の間に有意差が認められたのは，総語彙数，名詞語彙数，動詞語彙数，形容詞・形容動詞語彙数のすべてであった．第Ⅰ期と第Ⅳ期の間に有意差が認められたのは，総語彙数，名詞語彙数，動詞語彙数，形容詞・形容動詞語彙数のすべてであった．

第Ⅱ期からの変化をみると，第Ⅱ期と第Ⅲ期の間には，動詞語彙数にのみ有意差が認められた．第Ⅱ期と第Ⅳ期の間に有意差が認められたのは，総語彙数，名詞語彙数，形容詞・形容動詞語彙数であった．

第Ⅲ期からの変化をみると，第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に有意差が認められたのは，総語彙数，名詞語彙数であった．

表２　第Ⅰ期から第Ⅳ期における
語彙数の有意差の有無

		第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
第Ⅰ期	総	*	*	*
	名詞	*	*	*
	動詞	*	*	*
	形容詞		*	*
第Ⅱ期	総			*
	名詞			*
	動詞		*	
	形容詞			*
第Ⅲ期	総			*
	名詞			*
	動詞			
	形容詞			

Ⅳ．考　察

１．総語彙数と年齢の関係

１歳６か月から２歳６か月を対象とした横断的研究によると，総語彙数は２歳０か月で200語弱，２歳６か月で500語程度とされている[6]．本研究は，２歳代を４期に分け分析を行ったため，正確な比較はできないが，２歳０か月を含む第Ⅰ期の238.5語，２歳６か月を含む第Ⅲ期の508.0語という結果は先行研究とほぼ一致し，今回の結果がより一般的傾向を示していると考えられた．一方，縦断的研究によると，総語彙数は２歳０か月で300語，３歳０か月で900語弱[2]と言われており，本研究の総語彙数の方が少なかった．このような差がみられた理由は，縦断的研究ではビデオ録画を用いた方法や家族の協力を得て新しく出てきた発話をその都度記録するといった表出語彙を確実に記録できる方法をとっていることが考えられる．

段階的な獲得傾向としては第Ⅰ期から第Ⅱ期，第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけての総語彙数に有意差を認めた．一般的に語彙獲得には２つの段階がある[5)8)]とされている．第一段階（潜伏期）は，生後10か月から１歳５か月頃に30～50語の語を産出するようになる時期である．この時期は表出語彙数がほとんど増えることがない．次の第二段階（命名期）は，１歳６か月以降の自発的に50語以上の語を産出するようになる時期である．この時期は表出語彙数の爆発的増加がみられ，名詞の獲得が中心に進む．本研究における第Ⅰ期から第Ⅱ期への総語彙数の変化は語彙獲得の第二段階もしくはその延長線にあたると考えられる．

一方，第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての総語彙数には有意差が認められなかった．総語彙数に明らかな変化のある時期がある一方でほとんど変化のない時期の存在が示唆された．

従来の縦断的研究では２歳以降語彙数は停滞することなく伸びていくものと考えられてきた．しかし，縦断的研究は少数事例の研究であり，そこから各年齢における語彙の一般的，普遍的特性を導き出すにはその事例の特殊性を考慮した慎重な推論が必要である[10]．その意味で今回横断的研究により語彙数にほとんど変化のない時期が認められたことは，より一般的な語彙獲得の傾向を示したものと考えられ意義深い．

さらに，この総語彙数にほとんど変化のない時期は，①２歳３か月から２歳８か月の約半年である点，②この期間の後に総語彙数に変化がみられる点が，１歳代でみられる潜伏期の特徴と類似していた．これより，２歳代

においても語彙獲得の潜伏期が存在する可能性が示唆された．１歳代でみられる潜伏期はことば（単語）と意味を関連づけて使用することに苦労する時期とされる[11]．一方，２歳代は２語発話が安定的にみられる時期であり，２語発話と意味の関連づけがなされているのではないかと推察される．また，２語発話期における子どもは，場面状況を認知し他者に向けて何らかの言語表現を行う[12]．このことも，２歳代の潜伏期の要因の１つと考えられた．

２．品詞別語彙数と年齢の関係

１）第Ⅰ期から第Ⅱ期

第Ⅰ期から第Ⅱ期では，名詞語彙数，動詞語彙数に有意差が認められた．この時期は前述したように，語彙獲得の第二段階もしくはその延長線上にあたると考えられる．１歳６か月以降に起こる表出語彙数の爆発的増加は名詞の獲得を中心に進むとされてきたが，この時期の変化は名詞に加えて動詞が関わっていることが示された．小椋[13]の縦断的研究によると日本語獲得児における動詞急増の時期は名詞急増と同時期，もしくは名詞急増の後であったと述べている．本研究においては１歳代を対象としていないため正確な比較はできないが，動詞語彙数の明らかな変化は名詞語彙数の明らかな変化の後であることが示唆された．

また，全語彙数に占める割合が名詞は減少し，動詞は増加していた．表出語彙数は200語を過ぎたころから事物名称の割合は下降へと転じるとされており[11]，本研究の結果はこれを支持する結果となった．

２）第Ⅱ期から第Ⅲ期

第Ⅱ期から第Ⅲ期では，動詞語彙数のみに有意差が認められた．この時期は，総語彙数には有意差が認められず，２歳代における潜伏期であると考えられることは前述した．また，全語彙数に占める名詞の割合は減少，動詞の割合は増加し，他の時期に比べても変化が顕著であった．つまり，この時期は動詞語彙の獲得数が名詞語彙の獲得数を上回っており総語彙数としてはほとんど変化がみられないが，表出語彙に質的な変化のある時期であることがわかった．塩見ら[14]は，２歳以降表出可能な動詞が飛躍的に増加すると述べており，第Ⅰ期から第Ⅱ期，第Ⅱ期から第Ⅲ期の動詞語彙数の明らかな変化はこれにあたると考えられる．

３）第Ⅲ期から第Ⅳ期

第Ⅲ期から第Ⅳ期では，名詞語彙数に有意差が認められた．この時期にみられた変化は第Ⅰ期から第Ⅱ期でみられた名詞語彙数と動詞語彙数の変化ではなく，名詞語彙数のみの変化であった．１歳代で語彙獲得の中心が名詞であること，２歳代においても第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけては名詞語彙数に明らかな変化がみられたことを考えると，動詞語彙数に明らかな変化がみられたのは比較的短期間である．村田[9]は意味が十分に理解されないまま使った語は多くが一旦消失すると述べている．名詞が実物自体を表すのに対し，動詞は自分自身や他人の一時的な動作を表す．その点で，名詞より動詞の方が，意味が十分に理解されないまま用いられる可能性があり，このようなことが動詞語彙の継続的な獲得が比較的短期間となってしまう要因であると考えられた．

Ⅴ．まとめ

１．２歳０か月から２歳11か月の子ども300名の表出語彙の発達について語彙チェックリストを用いたデータ分析を行った．
２．年齢と総語彙数およびすべての品詞別語彙数に正の相関を認めた．
３．総語彙数の中央値は第Ⅰ期238.0語，第Ⅱ期423.0語，第Ⅲ期508.0語，第Ⅳ期661.0語であった．
４．第Ⅱ期と第Ⅲ期の間には総語彙数に有意差が認められず，２歳代において総語彙数にほとんど変化のみられない潜伏期が存在することが示唆された．
５．２歳代における潜伏期では動詞語彙数のみに有意な変化が認められ，表出語彙に質的な変化があることが示唆された．
６．２歳代における動詞語彙数の明らかな変化は名詞語彙数に明らかな変化がある１歳代から２歳前半に比し，短期間であることが示唆された．

Ⅵ．文　献

１）岩淵悦太郎，村石昭三：幼児の用語．日本放送出版協会，1976.
２）前田富槙，前田紀代子：幼児の語彙発達の研究，武蔵野書院，東京，1983.
３）大久保愛（村井潤一編）：構文の発達　ことばの発達とその障害，第一法規出版，1976.
４）小椋たみ子：日本語獲得児の語彙発達－名詞優位・動詞優位に及ぼす要因の検討－．平成11年度研究成果報告書「心の発達：認知的成長の機構」：205-213，1999.
５）藤原雅子，今給黎禎子，安川千代，他：１歳代の語彙発達－１歳0か月から１歳11か月の表出語彙－．

九州保健福祉大学研究紀要６：235-241，2005.
６）藤原雅子：語彙獲得と２語発話獲得の関係について―１歳６か月から２歳６か月児における表出語彙の検討―．九州保健福祉大学大学院修士論文集，2007.
７）小椋たみ子：健常児，障害児の言語下位領域間の関係：語彙発達と文法出現との関係.「心の発達：認知的成長の機構」平成10年度研究成果報告書：212-219，1998.
８）小林春美（秦野悦子編）：ことばの発達入門．大修館書店，2001.
９）村田孝次：幼児の言語教育．朝倉書店，1973.
10）村瀬俊樹：子どもの語の獲得における養育者のことばの役割．心理学評論49（１）：45-59. 2006.
11）小林春美（小林春美，佐々木正人編）：子どもたちの言語獲得．大修館書店，1997.
12）神戸陽子：子どもの１語発話期から２語発話期における認知発達（１）―知的障害をもつ子どもの２語発話出現期の認知的前提―．日本発達心理学会第10大会発表論文集：232，1999.
13) 小椋たみ子，中則夫，山下由紀恵，他：日本語獲得児の語彙と文法の発達：Clanプログラムによる分析．神戸大学発達科学部研究紀要４（２）：31-57，1997.
14) 塩見将志，笠井新一郎，岩本さき他：２歳児相談における事前問診の語彙チェックリスト作成の試み―文法カテゴリーによる分析：動詞―．高知リハビリテーション学院紀要２：49-53，2000.

謝辞

今回，本研究を行うにあたりご協力頂いた保護者や保育士の方々，施設長様に深く感謝の意を申し上げます．